

## 7. 自然災害は相手を考えないデストロイヤー

自然災害に対しての防災は、さまざまな面に関係することから総合的な対応が求められています。ということは、多様な面からのサポートをしていかないといけないということにもなります。これは医療や福祉と同じアプローチが必要だということで、福祉社会をめざすことになれば、自然災害への対応の方法と共有することも可能かもしれません。防災へはさまざまな視点から包括的なアプローチが必要ですが、すべてにエキスパートである必要はなくお互いに考え方を理解して情報を共有して実践していくことが大事になります。自然現象が災害になるにはそれなりの理由があるわけで、それを理解して行動することが周囲への説得力にもなり、水平展開していく上でのサポートになるということです。そもそも自然災害は、大昔は一つの災害は一つの原因で起きるという単線的な考えであったのですが、自然現象の発生構造が大きく変容していく中で、さまざまな環境が変化し、生活全体や社会のスタイルが多様化してくると、自然災害とはいえ、生活様式、コミュニティ、社会全体のあり方というところまで広く関係するようになっていきます。つまり、素因と誘因が単一ではなくなっているということです。こうしたことになっている背景はさまざまですが、そのためにハイテクなツールが必要だということではないと思います。ある意味で自然と共生する素朴で日常的レベルでの個人のライフスタイルや生きがいあるいは地域とのつながりというようなものに根ざした生き方が防災を支える災害文化を醸成することにつながるようにも考えられます。そうしたことで地域防災力がアップし、一人ひとりが自然現象に関心を持ち続けるようになるのだということにもつながります。そもそも、災害とは自然現象とわれわれの生活環境との関係において、相互のズレが生じて変化するとすれば、そのギャップが生じない制御が必要になると思います。したがって、自然災害を一面から見るのではなく、これまでの社会経済が目標ではなく、コミュニティの大切さを改めて認識する、労働時間と働き方について見直す、経済格差や消費と生産の関係のありかた、欲しいものと必要なものを峻別するライフスタイル、自然環境の持続性など、多用なかかわりの中で、新たにその背景を見直すことこそが大変に重要なことです。安全安心な持続可能な社会を構築する上でも、自然災害とわれわれの生活スタイルのあり方は不可分なもので、極めて重要なことになると思います。昨今の自然災害について、これまでとは異なる気象の変化などによる事象が見られるようになっていて、ハードでは対応しきれず、自然環境に見合った社会環境が必要になっているような気がしています。これは、医学の世界でも同様らしく、「現代の病」の大半は、人間の生物学的組成と環境とのギャップから生じているという進化医学の考え方があるそうで、類似性を感じます。